
始皇帝・謀殺

夢野ユーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始皇帝・謀殺

【コード】

N3352N

【作者名】

夢野ユーマ

【あらすじ】

始皇帝、その生涯を親世代の生涯から書き、中国古典を自由自在に楽しみながら、エンターテイメントに再構成する。

君子は豹変す（前書き）

こんにちは。同じタイトルのパイロット版を焦って、出してしまいました。少し丁寧に書いています。ペースは分かりませんが最後まで書ききります。どうぞよろしくお願いします。

参考文献はくたたくになるので、省略しますが、何かお尋ねがあればメッセージや感想欄をご利用して下さい。文学談義は好きなので、大歓迎です。

古典・歴史作品をエンターテイメントに再構成する時、よい点があれば原典の偉大さ。つまらない点があれば私の罪です。

君子は豹変す

生きる。太宰治が言ったようにそれは苦しい闘いかも知れない。今の時代もそうだし、二千年以上昔の中国大陸もまたそうだった。

紀元前3世紀半ばごろ、趙の都・邯鄲。そこは繁栄を極めていた。ある通りの料理屋が屋外にまで席を作り、そこに一組の男女がいた。絶世の美男美女である。男は堂々たる体格の美丈夫。派手ではないが、立派な着物をまとっている。眉太く、凛々しく、よく陽に灼けて男らしい。男は酒を徳利に口をつけてぐび飲みしていた。女は美しかったが、気をつけて見ると肌は浅黒く、中国の女性とは少し違う美しさだった。女は旺盛に料理を食べていた。

「紅紅、美味いかい？」

女は顔を上げず、うなずいた。肉そばをゾルルーと食べている。男はまたぐびっと酒を飲んだ。

「呂不韋様！呂不韋様！」

一人の少年が駆けて来た。その少年も東洋人ぽくない顔だった。髪も金色で、肌の色は白く、瞳は青かった。中国大陸よりずっと北西の異民族の血が混じっている。

「分かりました！分かりましたよー！同じ客を二度と取らない女郎のいる店」

少年は呂不韋と紅紅の席に駆け寄った。

「車でなく、歩いて行けそうか？」

「はい、意外と近くです」

呂不韋が徳利に口をつけると少年は不満そうにした。

「行儀悪いな。もう」

少年は酒を盃に注ぐと呂不韋に差し出した。

「ありがと。愛羅^{アイラ}」

呂不韋は愛羅の頭を撫でた。愛羅は笑みくずれる。

呂不韋は立ち上がると、店の娘に貨幣を渡した。代金に乗せして娘が笑みくずれる。が、呂不韋が調子に乗って娘の尻をさわると娘は着物の袖で呂不韋をはたいた。

呂不韋は中国全土を股にかけて歩き回る豪商だった。商人と言っても弱々しくない。隊列を作って行商する時は自ら剣や槍をとって闘わねばならない。頭もよくなければならない。

そんな呂不韋は邯鄲は特に好きだった。邯鄲は不思議な街だった。呂不韋は戦国の世に生きていた。そして呂不韋こそが、その戦乱に終止符をうつ存在なのだった。それはそれとして、邯鄲を首都とする趙の国は強国・超大国の秦の侵略にさらされ、いつ滅びてもおかしくなかった。それなのに邯鄲は大いに栄え、人々は生きる熱気にあふれていた。目の前の利益を追って、迫る危機に気づいていないのか。それとも少しでも利益を得ることで強かに生き残ろうとしているのか。それは分からないが、人々はとにかく生命を燃やし、それぞれに愛しあい、それぞれに欲望を抱き、それぞれに罪を犯し、必死に生きていた。その熱気にふれると呂不韋もますます命の延びる思いがするのであった。

また現実主義者の呂不韋からすると、戦の危機は同時に、いろんなもうけ話が転がっていることも意味していた。

夕日が西に没ちようとしている。しかし、邯鄲は不夜城であった。呂不韋は唇の端で笑った。夜の邯鄲は美しい女たちであふれる。その中でも、頂点に君臨する女にこれから逢いに行く。

その女の名は・・・朱姫。

呂不韋は聞き捨てならぬ噂を聞いたのである。朱姫という女郎は二度と同じ客を取らないという。決して高い金をふっかけてくる訳ではないが、どんなに大金を積まれても、どんなに宝石や毛皮を贈られても、二度とは同じ男と寝ないという。けしからん女だった。実は呂不韋は呂不韋で、二度と同じ女と寝ることはなかったのだ。朱姫というのはどんな女なのだ。是非とも、自身の目で確かめたい。呂不韋は愛羅と紅紅だけを連れて、歩いて遊廓に向かった。たくさんの使用人を連れて、着飾って出かけるなど、柄ではなかった。

朱姫ほどの女のいる廓だけあって、呂不韋がフラツとやって来ても何も言わなくても、すぐ最高の部屋に通してくれた。

「何か召し上がりますか？」

「いや、いい。酒と軽いものだけくれ」

もったいぶることもなく、朱姫はやって来た。呂不韋はハツとした。成る程、確かに美しい女だ。邯鄲でも、これほどの女はいない。そして、頭のよさに裏打ちされた気の強さが全身から立ち上がっている。手強そうだ。しかし、面白い。呂不韋は舌なめずりした。朱姫も悠々と笑みを見せた。

「愛羅、紅紅、そなたたちはさがってよい。何か食事を頼んでもよいぞ」

「はい」

愛羅と紅紅が部屋を出ていく。紅紅はチラツと朱姫を振り返って見た。

呂不韋と朱姫は少しの間だけ、黙って見つめあった。しかし、朱姫が呂不韋にそつと座することを勧めた。二人は腰かけた。朱姫は手慣れた感じで、酒を盃につぐと、呂不韋に勧め、自身も飲んだ。

「私の悪い噂を聞いて、いらしたのですか」

「お前も俺の悪い噂を聞いているだろう」

「ええ」

朱姫は素直に肯定した。

「どうして同じ客をとらない？」

「あなたは どうしてなのですか？」

呂不韋は当然、そう訊かれることを予想していた。

「答えるのはなかなか難しい。一言で言うと、満足出来る相手に出逢えないのだ」

「私もそうです」

二人は声を上げて笑った。

「満足出来ないというのは、どちらの意味だ？」

「どちらと言っても、全てです」

「俺は全ての意味で満たす自信がある」

朱姫は笑った。

「呂不韋様は儒の教えが嫌いとおっしゃっていますね」

「うむ」

「私も儒の教えは嫌いです」

呂不韋は少し茶化した。

「嫌いと言うほど勉強しているのかい？」

「ええ、若い学者で貧しい子がいて、その子に習ったのです」

「ほう。その子は怎么样了」

「『論語』を一通り習って、お礼に一回相手してやりました」

呂不韋は大声で笑った。

「儒の教えは偽善的です。所詮は家庭が大事なだけの利己主義を美しい言葉で飾っているだけ。私は家庭とか世間があまり好きでないのです。苦手です。もっと言うと弱い男が苦手です。口先で強ぶったり、賢ぶったり、善人ぶったり。私の前で虚勢を張りながら、最後は私を家庭に迎えようとして、ちよっと私に批判されるとしつぱを巻いて家庭に帰っていくつまらない男が」

朱姫のまくしたてる様子は少し猛々しくさえあった。呂不韋は少し真剣な顔をした。

「俺もだいたい同じようなことを思っているよ」

呂不韋は朱姫の手をとった。

「しかし、儒の教えは複雑でな、世間の人間が思っているより深い」
呂不韋は朱姫の腰を抱きよせ、唇を奪った。

「そなたとはもつといろいろ話し合いたい」

朱姫は呂不韋の着物の前をはだけた。逞しい胸が、腹があらわれる。
朱姫は厚い胸に手をふれた。

そして一夜が明けた。

呂不韋が目を覚ますと、朱姫が顔をのぞきこんでいた。

「どうだった？」

「そうですね・・・」

朱姫はちよつと眉をひそめると言った。

「私を身つけしてくれませぬか？」

呂不韋は勝ち誇ったように笑った。

「昨日の言葉と違わないか？」

「違いますね・・・」

朱姫は少し笑った。そして真剣に言った。

「君子は豹変す」

呂不韋は大爆笑した。朱姫は真剣に続けた。

「君子は豹変す。『易経』の中の言葉です。君子、立派な人間は自分と違っているかと悟ったら、すぐ反省して、正しい考えに生き方を変えられます。私は小人、つまらない人間でないので、あなたと

体を合わせて今までの考えの間違いを悟りました。だから正しい考えに考えを改めます」

呂不韋はニヤーと笑った。

「実のところ、俺も豹変したのだ！」

二度と同じ女を抱かない男。二度と同じ男に抱かれない女が抱きしめあった。

奇貨居くべし

邯鄲の人々は口さがない。一日中、呂不韋が廓にいて、翌日の夕方に館に帰ろうとするころには、人々は呂不韋の姿を見かけて笑ったり、耳打ちをしたりしていた。もちろん、呂不韋はそんなことは気にしない。

館に帰るのには馬車を呼び寄せておいた。呂不韋が朱姫を連れて帰ると言った時、廓の人々は、よく朱姫が納得したものだ、と驚いたが、止めはしなかった。呂不韋の力は小国の王より強いからである。

朱姫が馬車に乗る時には野次馬たちが押し寄せていて、どよめきを上げた。朱姫はそんなことに動じる女ではない。紅紅と愛羅も馬車に乗り、車が走り出す。先払いの男が馬に乗り、人々をかき分ける。

朱姫は毅然と顔を上げて、座っていた。ふと道端の男を指差した。

「あの男を見て下さい」

とても生活に疲れた感じのもっさりした男が赤ちゃんをおんぶして周りにたくさんの子供がまつわりついていた。太ったおかみさんの姿も見える。

「あの男に文字と『論語』を習いました」
流石に呂不韋も絶句した。

「あなたには遠く及びませんが、あなたの次にお上手でした」
朱姫は澄まして言った。

啞然とする呂不韋は別の馬車がすれ違っていくのにハツとした。呂

不韋のように立派な車ではない。しかし、そこには麗しい、若い男が一人、座っていた。立派だが時代遅れの着物をまとっている。朱姫もチラリとその男を見た。

「あの人は誰か知っているか？」

「ええ、秦王の孫、子楚様です」

奇貨居くべし！！とんでもないもうけものだ！！

呂不韋は全身が震えるような感じがした。

普通の間人だったら、朱姫と一緒になることが出来たら、天に上る心地もして、そのことに夢中になってしまっただろう。しかし、呂不韋の鋭い勘は子楚にけた外れの利をもたらす可能性を察したのである。

とりあえず、呂不韋はその夜は朱姫に尽くした。互いに今までの満たされなさをおぎないあった。

翌日、呂不韋は湯を浴びると車に乗って出かけた。朱姫に忍びで逢いに行つた時と違って、一大行列を作り、贈り物を山のように用意して、秦王の孫・王子子楚に対面しに、出かけた。

子楚の館は趙の王族や、高官、豪商の住む高級住宅地の外れにあった。人はまばらな、閑散とした感じがした。不細工な少年が出てきたので、呂不韋は名刺を渡した。少年は一度、奥に行き、戻ってきた。

「子楚様はお会いになるそうです」

呂不韋は館の奥に向かった。

子楚はハンモックに横になり、呂不韋の名刺をさわって、遊んでいた。ちなみに紙が発明されていないので、呂不韋の名刺は木で出来ていた。呂不韋はこんなちまちましたものをいちいち思いつく男ではなかった。ただ、ある商人が発明したのを面白がって、持っていただけだった。

呂不韋は子楚が腹の辺りに置いた竹簡（竹の板。繋ぎ合わせて本とする）を何のことわりもなく、手にとって見た。

「『楚辞』ですな」

「はい、屈原の『汨羅変』です」

子楚は呂不韋の手から、そっと竹簡を取り戻した。

「呂不韋よ、そなたは何か勘違いしています。私は何の利益も生まない。はかない存在です」

呂不韋は恭しく膝まずくと、額を床にぶつける礼を行ってから言った。

「殿下は掘り出し物です。人気のある商品は誰でも欲しがると、商人なら扱おうとする。しかし、誰も顧みないものに値うちを見出だすのが商人の腕の見せどころ」

子楚はそっとハンモックを下りると、威厳を持って立った。

「私は秦王と楚王の二人を祖父とする王子です。そのことを誇りに思っています。しかし、今の立場は祖国に見捨てられた人質です。私は趙王のとりこで、秦が趙を攻める度に処刑されそうになっているのです」

「しかし、処刑されず、生き残っている」

呂不韋は立ち上がるとニヤリと笑った。

「弱小国の王はだませても、私には下手なお芝居は通じない」
子楚の唇が震えた。

「確かにあなた様は見捨てられたようになって、ご自分を屈原になぞらえている。しかし、同時に趙王がご自分を殺すことはないと強かに見切っている。頭もよく、度胸もおありだ」

呂不韋は子楚の背後に回り込んだ。

「趙王の頭に血がのぼって、あなたに危害をくわえたら、その時こそ、秦は趙を滅ぼすでしょう。あなたはそのことを見越して、表面上はひ弱に振る舞っている」

呂不韋は子楚の手首を握った。

「殿下、俺と手を組みませぬか？殿下は確かに秦王と楚王の血を引く、天下人にふさわしいお方だ」

呂不韋は緊張する子楚に抱きついた。子楚は体を強張らせたが、拒みもしなかった。

「俺とあなた様が手を組めば天下をとれる。俺たちが出会ったのは天の意志であろう」

呂不韋は子楚のあごを持ち上げ、唇に唇を重ねた。子楚は拒まなかった。

「強かに我慢を重ねてこられただろうが、孤独で辛かったです。しかし、我々が協力すれば、こんな小さな王国ではなく、中原の全土を手に入れられる。あなた様はあるがままで、完璧で美しい」

子楚の瞳から涙がこぼれた。

「とりあえず、今日持参した贈り物で召し使いや兵を雇い、秦王国の記念日には行事を盛大に行って下さい。金も品物も、また届けさせます」

子楚は少し落ち着いた。

「そなたはどうするのです？」

「旅に出ます。あなた様の祖国へ」

呂不韋は子楚の正面に回り込み、改めて子楚を抱きしめた。

身体髪膚は父母よりうけて

呂不韋は秦王国に行こうと思いつたが、後事を託すべきはやはり朱姫だった。

「朱姫よ。そなたは平凡な家庭は嫌と申ししていたな。その気持ちは変わらぬか？」

「はい、もちろんです」

「では、俺が秦王国に旅に行くと言っても恨まぬな」

朱姫はうなずいた。動じる気配はなかった。

「俺は子楚様と組んで、天下に大勝負を仕掛ける」
流石に朱姫も驚きで目を開いた。

「お前は、この館に子楚様を引き取り、世話をしながら、身を守って差し上げてくれぬか？」

「いいですよ」

朱姫は快諾した。

「子楚様はめんどろがないので、けっこうです」

呂不韋は邯鄲から秦へと旅立った。

別に辛気くさい旅でなく、土地土地で人気の女郎や男娼に相手をしてもらった。しかし、朱姫のような悦びに満ちた女もいなければ、子楚のような汚れなき純粋な男もいなかった。一時の快樂を与えてくれるに過ぎなかった。

呂不韋は遊んだり、商売をしたり、闘ったりしながら、秦王国に入った。

当時、子楚の祖父はもう高齢で王太子の安国君の妃・華陽夫人が大いに権勢をふるっていた。呂不韋はまず華陽夫人の姉・麗雷レイライに対面を願い出た。麗雷は徒然を慰めるたむ、喜んで呂不韋に会ってくれた。

呂不韋はもちろん、様々の珍しい品を麗雷に贈り物として、用意していた。

「呂不韋、よく参りました」

呂不韋は膝まずき、麗雷の手をとり、口づけした。

「奥方様、今日参ったのは別儀でもありません。子楚様の使者として、厳密に言くと、私は子楚様と手を組むことにしたのです。それで華陽夫人様にとりつぎをお願いしたいのです」

麗雷は優しく微笑んだ。

「私がかまわないですよ。妹を説得するのは難しいと思いますが、やってみなさい。そなたなら出来るかも」

そして、麗雷は呂不韋に微笑みかけた。

「けっこうな贈り物ばかり、ありがとう。でも、私、もう一つ欲しいものがあるのですが・・・」

呂不韋も不敵な笑みを浮かべると、麗雷の方に近づいて行った。

二日後、華陽夫人が対面を許可すると言うので、呂不韋はまた、たくさんの贈り物を用意して、夫人の宮殿に出かけた。

華陽夫人は年増だが、美しく、頭のよさそうな女性だった。麗雷の

ような愛想はなかった。

「姉からとりつぎがありました。なくても会うつつもりでしたが。呂不韋、そなたには色々な意味で期待しています」

華陽夫人は立ち上がった。

「皆、さがれ」

侍女や衛兵が席を外す。

「子楚と手を組んだそうですが、そなたには何の旨味があるのです？」

「そうですね・・・私めのことより御身のことをお考え下さい。誠に失礼ながら、妃殿下にはお子がありません。そして安国君様には二十数人のお子があります。その誰かが王太子となり、王となれば、王太后はその母親です。妃殿下はこの王宮にご自身より上の位の女が現れても我慢出来ますか」

華陽夫人の表情が少し険しくなった。

「子楚様の母は楚王の王女ですが、お産で亡くなりました。そこで子楚様を妃殿下の養子にして、ゆくゆくは王とすれば、妃殿下は王太后として権勢を保つことが出来ます」

華陽夫人はうすく笑った。

「そのようなからくりは私も少し考えました。しかし、子楚には一つだけ欠点があります」

呂不韋は真剣な表情を見せた。

「性癖という意味でなく、子楚は子供が出来ないのです。調べさせました。本人も安国君も知りません」

東洋の医学には未だ解き明かされていない技術がたくさんある。華

陽夫人はそういうものを心得ていたのであろう。

ところが、華陽夫人は呂不韋に驚くべき言葉を投げかけた。

「呂不韋よ。その辺りをそなたが何とか出来るのなら、子楚を次の王太子にしてもよい」

「分かりました。何とかいたしましょう」

呂不韋は一瞬にいろいろのことを考え、即答した。

一つの王朝の血脈が大事にされた日本と違い、王朝が数多く興亡した中国では血脈など力の前では無力だった。呂不韋と華陽夫人は暗黙のうちに共犯関係を結んだのである。

華陽夫人は意味ありげに呂不韋に笑いかけた。

さて、数日後、呂不韋は將軍の蒙剛にも対面していた。蒙剛は呂不韋が宿泊していた豪華な館の中庭に招かれた。

「將軍様、呂不韋でござる。邯鄲の子楚様を王太子にする運動に参つた」

「ほう子楚様を。しかし、何故、それを私に？私はご政道には口出しはしない」

「それはそれ。これはこれ。子楚様の将来の即位は將軍にとっても必ず有利になる」

蒙剛はいぶかしげな顔をした。

「俺は商人に過ぎぬが、こう思う。戦は事前の根回しで決まるところがある」

「うむ、確かにそういうところはある」

「だろー！そう考えると子楚様には旨味がある。秦王国の軍事力に脅威なのは楚王国だけだろー。しかし、子楚様が王になれば楚王国の末裔ということと楚の国の有力者に運動しやすくなる」

蒙剛は成る程と言う顔をした。

「積極的に働きかけてくれとまでは言わない。安国君様から下問があつたら、否定しないでくれ」

呂不韋は早口で言いきつた。蒙剛は真剣な顔でうなずいた。

さらに何日かすると呂不韋は安国君の宴に招かれた。話をまとめた、と華陽夫人から連絡があつたのだ。呂不韋は着飾つて、出かけた。

安国君は宮殿で華陽夫人、麗雷、蒙剛らに囲まれていた。小柄で貧相で、華陽夫人よりずっと格下の男に見えた。

「呂不韋よ。よく我が王国に来てくれた。素晴らしい贈り物もありがとう。子楚に目をかけてやってくれているそうだな」

「はい、殿下の王国でますます盛んに商売出来るようお力添えを」
呂不韋はわざと卑俗な次元のことを言い、膝まずくと額を床につけた。安国君は天下の英雄を平伏させられる己が力に酔い、呂不韋に隣の席をすすめ、愚かなことをしゃべりちらしていた。呂不韋は料理に舌鼓を打っていた。

「呂不韋よ、儒の教えで、そなたが大事にしている言葉を教えてくれ」

安国君が突然言った。一つもない。そんな野暮なことは言わず、呂不韋は布で口の辺りを拭くと一気に断言した。

「身体髪膚は父母よりうけてその他の一切は世界からかすめとる！」

華陽夫人と、麗雷と、蒙剛の笑いが爆発した。

「身体髪膚は父母よりうけてこれを傷つけず」これも本来の意味を歪められて、道徳にすりかえられてしまった言葉である。古代中国では罪人は体に刺青や、焼き印を入られた。そして孔子の弟子で特に業績のなかった曾子は「働きもないが、悪いこともしていないよ」という消極的な意味で、身体髪膚は、と言ったのである。呂不韋はそれを見下して、笑いのめす意味で冗談を言ったのであった。

しかし、そこには呂不韋の野心も込められている。安国君は意味も分からぬまま、周りに合わせて、笑っていた。

「呂不韋は愉快な人物じゃ。最近はず楚のめんどろを見てくれているそうだな。呂不韋が我が王国に力をかしてくるのはありがたい。華陽夫人に子楚を跡継ぎにしろと頼まれた。よい話じゃ」

安国君は呪術師に璧という宝玉を用意させ、それに誓いをかけて、割らせた。

「子楚を跡継ぎにする。誓う。誓う」

呂不韋は璧の半分を受けとった。安国君の誓いなど頼りにはならないが、まあいい。欲しいものは・・・己の力で奪いとる！

北辰その所に在り

さて、朱姫、子楚、愛羅、紅紅は不思議な共同生活をして、呂不韋の留守を守っていた。

朱姫は愛羅と、子楚に仕えていた不細工な少年・禁に命じて、館を守る若い男を探させた。愛羅と禁は市で廉という青年を見つけて、連れてきた。

逞しい青年だが、子楚や愛羅をいやに熱っぽく見ている。

まあいいか。私は楽だ。朱姫は廉を採用した。

意外な人材は子楚の料理番の平翁だった。

朱姫はクビにするつもりだったのだが、翁の料理は遊郭の料理よりずっと上手だった。翁はひどくなまりが強く、経験者より全く染まっていないものを連れてくるがよい、という意味と思われることを言った。

使用人は段々と集まり始めた。呂不韋と朱姫の富に目をつける者もいたし、子楚の情けの深さにひかれてくる者もいた。子楚は不遇な者がいると、すぐ雇ってやった。

朱姫は子楚とは共存の関係にあっただが、子楚が女に生まれて来なかったことで胸を撫で下ろした。子楚は奪うことの出来ない天性の品を持っていた。朱姫が呂不韋の館にやって来て、物好きな者が遊びにやってくることもあったが、意外と子楚の魅力に引き付けられる者が多いようだった。

子楚はどんな者の話でもフンフンと興味深そうに聞いていた。おおらかであった。そして時には屈原の「汨羅変」を熱っぽく朗読することもあった。楚王の血を引く子楚にとって屈原は広い意味での先祖な訳である。演技体質というのか、朗読する子楚には凄みすら漂っていた。それを見ると朱姫にはムラムラと対抗心が起こってきて、女郎の時にやっていた歌や舞をやってしまうのだった。

それがまた評判になり、子楚と朱姫に会いに、趙の高官、名族、有力者がやって来た。

呂不韋の目論見とはちょっと違う形だが、子楚は人気を得てきた。

朱姫は世の中を知り尽くしている女だったから、「天爵」という言葉も知っていた。身分高く、財産多くとも、下品で低俗で愚劣な人間はいる。王侯将相を相手にしてきた朱姫には分かる。むしろ、そういう奴が多いと言えた。逆に市井に生きようと人と争わず、ねたんだり、恨んだりしない上品な人間がいる。

子楚は本物の品と教養を備えていた。天爵があつたのだ。食事の時など、朱姫はそれをひしひしと感じた。

ある時、魚が丸々一尾煮て、山菜がかけられていた時、上品に骨をとり除こうと朱姫や紅紅、愛羅たちが四苦八苦している時、子楚は魚の頭をはして切り分けると指先で骨を巧みにとり除いた。それが、ちっともはしたなくならない。また肉まんやシューマイなどの点心や、菓子なども子楚は指先でつまんで食べることがあつたが、やはり卑しくならなかった。むしろ官能の香りすら漂っていた。

また人の出入りが多くなったころ、学者や貴族が何かを論争することがあつたが、子楚はむきになって口出ししたりすることはないが、

やんわりと自説を言うことがあった。

それは「そなたたちは、そう学んだかも知れないが、私は祖父の楚王様に、その舞台裏をうかがっているのです」などと、秘話を含んでおり、学者たちが急いで木簡に記録することも朱姫はよく見かけた。

ある午後、ハンモックで寝ている子楚に朱姫は膝まずいた。

「殿下、私に学問を教えてください」

「学問？」

子楚は本当に驚いたという声を出した。

「私は学問などやっていません」

「いえ・・・学者たちに話しているようなことを私に教えて欲しいのです」

育ちのいい人らしく、子楚は道の教えへの憧れなどを話し始めた。後に始皇帝が道の教えに傾倒する下地は、育ての父親と生みの母親によって養われた。

朱姫は人の話を引き出すのが上手だったので、子楚からいろいろ話を聞き取り、木簡や竹簡に記録していた。ある時、朱姫が筆を休めると子楚が体を起こし、言った。

「朱姫よ」

「はい」

「これは学問という訳ではないですが、ちょっと言っておきますよ。学者と話をする時は意見が合わなくても、彼らが研究していることをないがしろにするような言い方をしてはなりません。彼らは学問に誇りを持っていて、敵に回すと手強い」

朱姫は戸惑いつつ、うなずいた。この言葉の重みも、後年、明らかになる。

その時は廉が入ってきて、あいまいに終わってしまった。

さて、そのうちに呂不韋が秦から帰ってきた。

呂不韋は半分に割れた璧を子楚に渡した。

「王太子様は殿下を世継ぎにすると決めました。華陽夫人様も賛成です」

呂不韋の前に出ると、子楚はぼんやりして頼りなかった。呂不韋は留守中に増えた使用人に声をかけて、回ったりしていた。

その夜、呂不韋と朱姫は大いに歓を尽くした。そして、呂不韋は腕の中の朱姫にとんでもないことを持ちかけたのである。

「朱姫よ、殿下との暮らしはつらくはなかったか？」

「いいえ、穏やかなものです」

「そうか、それなら、そなた、殿下の妃になってくれぬか？」

「えっ！」

朱姫は驚いて、呂不韋の顔を見た。

そして、呂不韋の真意を悟ると、短いうめきをもらした。

「よいのでしょうか？」

「秦王国の人々も納得しているようだった」

中国の王朝の人々は先述したように、血脈や身分より、力を重んじた。

「妃になり、俺の子を産め。その子は秦王に、いや、それ以上の存在になる」

流石に朱姫も、そら恐ろしさにとらわれた。

しかし、朱姫は強い女であり、決断した。

朱姫は呂不韋の逞しい胸にすぎると、うなずいた。呂不韋の子を産み、子楚の子として育てることを決断したのである。

一方、子楚は屋外のハンモックに横たわっていた。胸の上で璧をもてあそんでいた。

と、廉が子楚の傍らに膝まずいた。

「殿下、おめでとございます」

子楚は身を起こし、苦笑した。

「おお、廉よ。何もめでたいことなどありません。このような乱世にお父上のような方の誓いなど、何の意味があるのか」

「し、しかし・・・」

廉は子楚に鎖を差し出した。

「これを市で探して参りました。璧を肌身はなさず、身につけられるように」

子楚は微笑んだ。

「廉……これはそなたの忠義のしるしとしてありがたく受けとります……」

子楚は鎖と壁をつなぎ、首にかけた。

廉は平服した。北の夜空には一際強く輝く星があり、その周りを小さい星が巡っている。

それは数奇な運命をたどる子楚たちを司る星かも知れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3352n/>

始皇帝・謀殺

2011年10月7日15時21分発行